

よるスキヤニング頻度の違いから農地では、オスよりもメスの方が警戒心が強く、他個体や周囲を気にする傾向がある。⑤属性ごとのスキヤニング頻度の違いからオトナ・ワカモノオスは、農地に出現中には他のクラスより警戒心が希薄であるという以上5つが示唆された。

計画 5-7

富山県のニホンザル地域個体群の分布特性と遺伝子変異

赤座久明（富山県立新川みどり野高等学校）

14年度共同利用研究（自由19）において、富山県の丘陵地に生息するニホンザルの群れは、ミトコンドリアDNAの塩基配列の比較から、遺伝的に異なる4つ集団（A, B, C, D）から構成されていることが分かった。この結果を第19回日本霊長類学会で報告した。15年度は、北アルプスを源流にする常願寺川と黒部川の上流域でDNA試料の採取をおこなった。立山連峰の西側に位置する常願寺川の支流（標高1200m）で採取し、DNAを抽出することができた7個の糞はすべてがAタイプであった。また、立山連峰の東側に位置する黒部川の本流と支流（800m～1900m）で採取した1個体（メス）の血液と15個の糞はすべてDタイプであった。一方、黒部川の東側に位置する後立山連峰の岩小屋沢岳（2630m）から鳴沢岳（2641m）にかけての稜線で採取した4個の糞のうち2個はBタイプであったが、他の2個はこれまでに県内では記録されていない新しいタイプ（Gタイプ）であった。常願寺川流域はAタイプ、黒部川流域はDタイプが、下流の丘陵地帯から上流の生息限界域まで連続分布しているが、夏に黒部川右岸の後立山連峰の稜線部を利用する群れは、黒部川沿いに分布する群れとは遺伝的に大きく異なる集団であることが推定される。

計画 5-8

白神山地野生ニホンザル群と地域社会の共生に関する研究

今井一郎（関西学院大）

本研究は、白神山地周辺地域に生息する野生ニホンザル群と地域社会との間に共生関係を築き上げるための方策を探ることを目的に実施した。2002年度に行なった共同利用研究（自由研究12）の成果の上に進めた。調査地域は鱒ヶ沢町・赤石川流域、岩崎村・松神地区および西目屋村内の諸集落である。鱒ヶ沢地域農業改良普及センターの協力で得られた被害金額などの資料を踏まえて、住民がもつニホンザル観と猿害問題に対する自治体当局の取り組みに焦点を当てて各地で聞き取り調査をおこなった。広域調査の結果、各地域、自治体でそれぞれの取り組みはあるものの、有害鳥獣捕獲許可を得て駆除することに頼らざるを得ない全般的な傾向が明らかになった。しかし、西目屋村では2002年度からAPP（アニマルパトロールプロジェクト：代表丸山直樹東農工大教授）による活動の一環としてNAP（西目屋村アニマルパトロール）活動が開始され今後の展開が注目される。和田一雄元東農工大教授がリーダーをつとめている。これは都市ボランティアによるニホンザル追い払い事業が中心となり、西目屋村のように過疎・高齢化が進む地域における日常的な労働力を補う点に効果が期待されるのである。西目屋村・農林建設課が協力して事業を進めている。この事業は地域住民、自治体、研究者と都市ボランティアの共同によって地域の環境保全を持続させようとする試みであり、また都市と農村部の人的交流を深める可能性を認めることもできる。今後はこの種の取り組みを長期的に追跡し効果を検証することにより自然環境、野生動植物の適正な保全策を検討する必要がある。